

『十二門論』和訳と訳註（第8・9章、第11・12章）

五 島 清 隆

1 はじめに

筆者は、2002年以降、『十二門論』（全12章）に関する論考¹⁾を発表してきたが、この中で、『十二門論』第1章～第7章と第10章の計8章については、既に和訳を公表している²⁾。本稿は、残り4章の第8章、第9章、および第11章、第12章の和訳・訳註を示し、合わせて、これらの章に見られる問題点を検討するものである³⁾。

2 第8・9章、第11・12章の和訳

第8章（「観性門」）⁴⁾

8.1 主題の提示

また、次に、すべての存在は空である。なぜか。さまざまな存在には自性（svabhāva）がないからである。〔次の偈に〕説くように。

第21偈 変異のすがたが見られることから、さまざま存在には自性がない〔ことがわかる〕。自性をもたない存在もまた存在しない。さまざまな存在はみな空だからである⁵⁾。

8.2 本論

8.2.1 無自性・空の主張

① ⁶⁾ さまざまな存在（事物・事象）にもし自性があるのであれば、変異するはずがない。⁶⁾ ところが、すべての存在に変異することが見られる。それゆえ、「さまざまな存在には自性はない」と理解しなければならない。

② また、次に、^(7→)もし、さまざまな存在に自性〔定性〕があるのであれば、〔直接的・間接的な〕さまざまな条件〔衆縁〕から生起するはずがない。もし、自性がさまざまな条件から生起するのであれば、自性は作られたもの〔作法〕ということになる。←⁽⁷⁾〔ところが〕^(8→)作られたものではなく、他に依存しない〔不因待他 nirapekṣaḥ paratra〕ものが自性なのである。←⁽⁸⁾

それゆえ、すべての存在は空なのである。

8.2.2 無自性・空と世間・出世間の法

8.2.2.1 反論「諸法空ならば世間・出世間の法は成立しない」

〔反論者が〕質問する。

^(9→)もし、すべての存在が空であるならば、生起することも、衰滅することもない。生起や衰滅がなければ、苦諦はない。もし苦諦がなければ集諦もない。もし苦諦や集諦がなければ、滅諦もない。もし滅諦がなければ苦の滅に至る道〔道諦〕もないことになる。

もし、さまざまな存在が空で自性がないのであれば、四聖諦はなく、四聖諦がないゆえに、四沙門果もなく、四沙門果がないから、〔八〕賢聖もない。これらのことがないがゆえに、仏・法・僧〔の三宝〕もなく、世間における言語習慣〔世間法 laukikasaṃvyavahāra〕もない。これは正しくない。

それゆえ、さまざまな存在がすべて空であるはずはない。←⁽⁹⁾

8.2.2.2 答論

〔論主が〕答える。

8.2.2.2.1 「世俗諦と第一義諦」

^(10→)二つの真理がある。一つは、世俗の立場での真理〔世諦 lokasaṃvṛtisatya〕であり、もう一つは究極的意義での真理〔第一義諦 paramārthasatya〕である。世俗の立場での真理に依拠して究極的意義での真理を説くことができる。←⁽¹⁰⁾ ^(11→)もし世俗の立場での真理に依拠しなければ、究極的意義での真理を説くことは出来ない。もし究極的意義での真理を得なければ、涅槃を得ることはない。←⁽¹¹⁾

もし、人が、〔この〕二つの真理を理解することがなければ、自分の利益、他人の利益、自他の利益というものを理解しない。このように、もし世俗の立

場での真理を理解するならば、究極的意義での真理を理解し、究極的意義での真理を理解すれば、世俗の立場での真理を理解するのである。

君は今、世俗の立場での真理を説くのを聞いて、「これが究極的意義での真理だ」と思いこんでいる。それゆえ、「〔論理的誤謬にもとづく〕敗北の状態〔失処 nigrāhasthāna〕に落ち込んでいるのである¹²⁾。

8.2.2.2.2 「無自性・空なればこそ世間・出世間の法は成立する」

諸仏〔がお説きになられた〕「縁起〔因縁法 pratityasamutpāda〕」を甚深なる「究極的意義での真理」と名付ける。¹³⁾ この「縁起〔因縁法〕」には自性がないから、私は、それを空と説くのである。¹³⁾

もしさまざまな存在が、さまざまな条件から生起しないのであれば、それぞれには自性〔定性〕があり、五蘊には生起や衰滅という特徴がないことになってしまうであろう。¹⁴⁾ 五蘊が不生不滅であれば、無常はない。もし無常がなければ、苦聖諦はない。もし苦聖諦がなければ、〔苦は煩惱を〕原因として生起する〔因縁生法 pratyayasambhūta〕とする集聖諦はない。さまざまな存在にもし自性〔定性〕があれば、苦滅聖諦はない。なぜか。自性には変異するということがないからである。もし苦滅聖諦がなければ、苦の止滅に至る道（苦滅道聖諦）もない。¹⁴⁾

それゆえ、¹⁶⁾ もし人が空を承認しなければ、四聖諦はなく、もし四聖諦がなければ、四聖諦を得ることもなく、もし四聖諦を得ることがなければ、苦を完全に知ること〔知苦 duḥkḥaparijñāna〕、集（苦の原因である煩惱）を断棄すること〔断集 samudayasya parihāṇa〕、滅（苦という原因の止滅）を現証すること〔証滅 nirodhasya sākṣātkaraṇa〕、道を修習すること〔修道 mārgasya bhāvanā〕はない。これらのことがないから、四沙門果はなく、四沙門果がないから、得（果に住する者 phalastha）と向（果に向かって進む者 pratipannaka）の者（＝四向四果の八賢聖）はなく、もし得と向の者がなければ、仏陀はない。縁起〔因縁法〕を否定するから教え〔法〕はない。教え¹⁵⁾がないから、教団（僧伽）はない。¹⁶⁾ もし、仏陀、その教え、その教団がなければ、三宝はない。もし三宝がなければ、世間的なあり方〔世俗法 saṃvyavahāra〕を破壊してしまう。

以上のことは正しくない。それゆえ、すべての存在（事物・事象）は空なのである。

また、次に、^(17→)もしさまざま存在に自性〔定性〕があれば、生起や衰滅もなく、不正な行為〔罪 adharma〕や正しい行為〔福 dharma〕もなく、不正な行為・正しい行為の果報もなく、^(←17) ^(18→)世間は〔多様なありようを失って〕常に一様なすがた〔一相〕となるだろう。^(←18)

それゆえ、「さまざまな存在には自性はない」と理解しなければならない。

8.2.3 諸法は自性もなく他性もない

① もし、「さまざまな存在に自性はなくても、他性 (parabhāva) によってある」と主張するのであれば、これもまた正しくない。なぜか。^(19→)もし自性がなければ、どうして他性によってあろうか。^(←19)自性に依拠して他性はあるからである。

② また、他性はとりもなおさず自性である。なぜか。^(20→)他性とは他の自性 (parabhāvasya svabhāva) だからである。^(←20)もし、自性が成立しないのであれば、他性もまた成立しない。もし、自性と他性が成立しないのであれば、^(21→)自性と他性とを離れて (svabhāvaparabhāvābhyām ṛte)、いったいどこに存在〔法 bhāva〕が〔成立することが〕あろうか。^(←21) ^(22→)もし、存在〔有 bhāva〕が成立しないのであれば、非存在〔無 abhāva〕もまた成立しない。^(←22)

それゆえ、いま、論理的推論によって吟味〔推求〕すると、^(23→)自性もなく、他性もなく、存在もなく、非存在もなく、^(←23)したがって、有為の存在は空である。

8.3 結論

有為の存在が空であるから、無為の存在もまた空である。有為・無為でさえ、空なのであるから、ましてや自我〔が空であるの〕はいうまでもない。

第9章（「観因果門」）⁽²⁴⁾

9.1 主題の提示

また、次に、すべての存在は空である。なぜか。もろもろの存在は、それ自体自性をもっておらず〔自無性〕、また、別のところからやって来るのでもな

い。〔次の偈に〕説くように。

第22偈 結果はさまざまな条件の中にまったく〔畢竟〕把握されることはない〔不可得 na gr̥hyate〕。また、別のところから来るのでもない。どうして結果があるであろうか²⁵⁾。

9.2 本論

さまざまな条件の、一つ一つの中にも集合の中にも、いずれの場合も結果が存在しないことは、〔第3章冒頭において〕既に説いた²⁶⁾とおりである。

また、この結果は別のところから来るわけでもない。もし別のところから来るのであれば、〔直接的〕原因や〔補助的〕条件から生起したことはない。また、〔原因と〕さまざまな〔補助的〕条件の集合の効能〔衆縁和合功〕²⁷⁾もない。

9.3 結論

もし結果がさまざまな条件の中になく、また別のところから来るのでもなければ、それは空ということにほかならない。結果が空であるから、すべての有為の存在は空である。有為の存在が空であるから、無為の存在もまた空である。有為と有為ですら空なのであるから、ましてや自我〔が空であること〕はいうまでもない。

第11章（「観三時門」）²⁸⁾

11.1 主題の提示

また、次に、すべての存在は空である。なぜか。原因が、それを原因とするもの〔有因法²⁹⁾〕の以前に、以後に、〔それと〕同時に生起することは不合理だからである。〔次の偈に〕説くように。

第25偈 もしある存在が、〔その原因の〕以前、以後、同時のすべてにおいて成立しないのであれば、その存在が原因から生起したということがどうして成立し得ようか³⁰⁾。

11.2 本論

11.2.1 「因果の三時不成」

³²⁾→ 「先に原因があって、その後にそれを原因とするものがある」というこ

とは、正しくない。なぜか。もし先に原因があつてその後に〔それを原因とするものが〕その原因から生起するのであれば、先の原因の時点ではそれを原因とするものは存在していないからである。いったい何にとつての原因というのであろうか。

もし先に〔あるものを〕原因とするものがあつてその後にその原因があるのであれば、原因が無いときにそれを原因とするものはすでに成立してしまっている。どうして、原因を必要としようか。

もし、原因とそれを原因とするものが同時だというのであれば、この場合もまた原因はないことになる。⁽³¹⁾ たとえば、牛の〔左右の〕角は同時に生起するが、左と右とはそれぞれの原因ではないように、⁽³¹⁾ ちょうどそのように、原因は結果にとつての原因ではなく、結果も原因にとつての結果ではない。同時に生起するからである。

それゆえ〔以前・以後・同時の〕三時のすべてにおいて、原因と結果の関係は不合理なのである。⁽³²⁾

11.2.2 「破と可破」

11.2.2.1 反論「破・可破の三時不成」

〔反論者が〕質問する。君は因果関係〔因果法〕を否定して「三時のいずれにおいても成立しない」とする。〔だとすると、君が行う否定と否定されるものとの関係にも、次のように、同じ論法が適用される。〕

⁽³³⁾ もし、先に否定〔破〕があつて、その後に否定されるもの〔可破〕があるのであれば、否定されるものがまだないときに、否定はいったい何を否定するのだろうか。

もし、先に否定されるものがあつて、その後に否定があるのであれば、否定されるものが既に成立してしまっているときに、どうして否定を必要としようか。

もし否定と否定されるものが同時だというのであれば、この場合もまた原因（根拠）はないことになる。たとえば、牛の〔左右の〕角は同時に生起するが、左と右とそれぞれの原因（根拠）ではないように、ちょうどそのように、否定は否定されるものを原因（根拠）としておらず、否定されるものも否定を

原因（根拠）としているわけではない。⁻³³⁾

11.2.2.2 答論「破・可破の不成は空義を成ず」

〔論主が〕答える。^(35→) 君の「否定と否定されるもの」の論法にも同じ難点〔過 doṣa〕がある。もしすべてのものが空であるのなら、否定も否定されるものも存在しない。君³⁴⁾は今〔否定と否定されるものが成立しえないと主張することによって〕空を説いたのである。つまり、我々の主張に根拠を与えたことになる。⁻³⁵⁾

もし我々が「否定と否定されるものとは〔以前・以後・同時の三時にわたって〕常に実在している〔常有〕」と主張しているのであれば、〔君がそれへの〕論難をしてもよいであろう。我々は「否定と否定されるものとは常に実在している」とは主張していないのであるから、そのような論難はふさわしくない。

11.2.3 「眼見の因果」

11.2.3.1 反論「因果の三時成立の実例」

〔反論者が〕質問する。^(37→) 日常経験として〔眼見³⁶⁾〕、先にある原因がある。たとえば、陶工が壺を作るように。また、後にある原因がある。たとえば、弟子によって先生があるように。弟子を教育し終わってその後に「かれは〔あの人の〕弟子だ。〔あの人が先生なのだ〕」と認められるように。また、同時にある原因もある。たとえば灯火と照明のように。〔つまり、三時の因は成立する。〕

〔それゆえ〕もし〔君が〕「先にある原因、後にある原因、同時にある原因は成り立たない」というのであれば、それは正しくない。⁻³⁷⁾

11.2.3.2 答論「因果の三時不成」

〔論主が〕答える。陶工が壺を作るなどといったものは、喩えとして相応しくない。なぜか。まだ壺が存在していない場合、陶工は何にとつての原因となるのであろうか。陶工と同じく、すべての先にある原因は成り立たない。後にある原因も同様にして成り立たない。まだ弟子がいない場合、誰がかれの先生なのであろうか。それゆえ、後にある原因も成り立たない。もし、「同時にある原因はある。灯火と照明のように」と主張するのであれば、それもまた同疑因になり〔成り立たない〕³⁸⁾。灯火と照明とが同時に生起するのであれば、ど

うして互いに原因となりえようか。

11.3 結論

以上のように、原因や条件は空であるから、「すべての有為の存在と無為の存在と自我とはいずれも空である」ということを理解すべきである。

第12章（「観生門」）³⁹⁾

12.1 主題の提示

また、次に、すべての存在は空である。なぜか。すでに生起したもの（utpanna, jāta）とまだ生起していないもの（anutpanna, ajāta）といま生起しつつあるもの（utpadyamāna, jāyamāna）とは〔いずれも〕不合理だからである。生起し終わったものは生起しないし、まだ生起していないものも生起しないし、いま生起しつつあるものも生起しない。〔次の偈に〕説くように。

第26偈　すでに生起した結果は生起しない。まだ生起していないものも生起しない。すでに生起したものといままだ生起していないものとの離れて、いま生起しつつあるものもまた生起しない⁴⁰⁾。

「生起したもの」というのは、結果が生起し出現したものをそう名付ける。「まだ生起していないもの」というのは、結果がまだ生起せず出現せず存在性をもっていないものをそう名付ける。「生じつつあるもの」というのは、生起を開始して〔それが〕まだ完了していないものをそう名付ける。

12.2 本論

12.2.1 「已生の不可得」

① ⁽⁴³⁾→ このうち、「すでに生起した結果が生起の作用をもつ⁽⁴¹⁾ ことはない」とは、この生は生起し終わっているのでもう生起することはないということである。なぜか。悪無限の過失が付随するからである。なし終わってさらになすことになるからである。もし〔最初の〕生が生起し終わって第2の生を生起させるのであれば、第2の生は生起し終わって第3の生を生起させ、第3の生は生起し終わって第4の生を生起させるであろう。最初の生が生起し終わって第2の生があるように、そのように、生は悪無限になってしまうであろう。それ

は、正しくない。

それゆえ、すでに生じたものが生起の作用をもつことはない。

② また次に、もし、「生（甲）が生起し終わってから、その生（甲）を生起させることになっている生（乙）が生起する。この生（乙）はまだ生起していないが〔甲を〕生起させる」と言うのであれば、それは正しくない。なぜか。〔そもそも〕最初の生はまだ生起していない状態から生起することになるから、その場合、二種の生があることになる。〔（甲）は〕生起し終わってから生起の作用をもち、〔（乙）は〕まだ生起していないのに生起の作用をもつからである。君は、先には決定的に説いていたのに、いまは未決定になってしまっている。すでになし終わったものはなされることはありえず、焼け終わったものが焼けることはありえず、すでに悟ってしまったものは悟ることはありえないように、ちょうどそのように、すでに生起し終わったものが生起の作用をもつことはありえないのである。

それゆえ、すでに生起したものが生起の作用をもつことはないのである。

12.2.2 「未生の不可得」

① まだ生起していないものもまた、生起の作用をもつことはない。なぜか。生（utpāda）と結びついていないからである。また、すべての未生起なるものに生があるという過失があるからである。もし、まだ生起していないものが生起の作用をもつのであれば、生を離れて生起の作用があることになる。これはつまり生起しないということである。もし生起の作用を離れて生があるのであれば、なす作用を離れてなすということがあり、行く作用を離れて行くことがあり、食べる行為を離れてたべることがあることになろう。以上のように、世俗のあり方（世間的言語習慣 vyavahāra）を破壊することになろう。それは正しくない。

それゆえ、まだ生起していない存在が生起の作用をもつことはない。

② また次に、もし、まだ生起していないものが生起の作用をもつのであれば、すべての未生起なるものが皆生起してしまうことになるだろう。すべての凡夫はまだ無上正等覚を生じていないが〔それが〕皆に生じてしまうであろう。不動阿羅漢（もはや煩惱によって動乱させられることのない性質を獲得した阿

羅漢)に煩惱は生起しないのに生起し、兎や馬などに角は生えないが、それも生えてしまうであろう。

それゆえ「まだ生起していなくても生起の作用をもつ」と説くべきではない。

③ **〔反論者が〕質問する。**「まだ生起していなくても生起の作用をもつ」とは、直接的・間接的条件が結合〔因縁和合〕して、時間、方角、作者、手段〔方便〕がそなわることがある場合であり、これがつまり、生起していなくても生起の作用をもつということである。「〔それらの条件に関係なく〕すべてのものが〔それ自身はまだ〕生起していなくても生起の作用をもつ」というわけではない。それゆえ、「すべてのものは生起していなくても生起の作用をもつ」という観点から批判すべきではない。

〔論主が〕答える。もしある存在が生起するとき、時間・方角・作者・手段、直接的・間接的条件の結合〔衆縁和合〕によって生起の作用をもつのであれば、その場合、先に実有であったもの〔定有〕が生起の作用をもつわけではなく、〔生起の〕前に無であったものが生起の作用をもつわけでもなく、有であると同時に無であったものが生起の作用をもつわけでもない。〔有、無、有かつ無の〕これら三種に生起の作用を求めることが不合理であることは、先に〔本論第2章「観有果無果門」の第3偈(=『中論頌』「観縁品」一・7)において〕説明した通りである。

それゆえ、まだ生起していないものが生起の作用をもつことはない。

12.2.3 「生時の不可得」

① 生起しつつあるものもまた生起の作用をもつことはない。なぜか。すでに生起したものが生起の作用をもつという誤謬と、まだ生起していないものが生起の作用をもつという誤謬があるからである。生起しつつあるものに、すでに生起したものの分が生じないことは先に〔12.2.1「已生の不可得」のところで〕説いた通りである。いまだ生起していないものの分が生じないことは先に〔12.2.2「未生の不可得」のところで〕説いた通りである。

② また次に、もし、生起を離れて生起しつつあるものがあるのであれば、生起しつつあるものが生起の作用をもつはずである。ところが、実際には、生起を離れて生起しつつあるものなど存在しない。

それゆえ、生じつつあるものが生起の作用をもつことはない。

③ また次に、もしある人が「生起しつつあるものが生起の作用をもつ」と主張するのであれば、その場合、二つの生起があるということになってしまう。第一は、生起しつつあるものが生起するとされるそれと、第二には、生起しつつあるものが生起させるそれである。〔生起しつつあるものという一つの基体が生起という〕二つの属性〔法〕をもつことはない⁴²⁾。どうして「二つの生起がある」などと言えようか。

それゆえ、生じつつあるものが生起の作用をもつことはない。

④ また次に、生起というものがまだないときに生起しつつあるものはない。生起ということがいったいどこで行われるのだろうか。生起が実行されるところがなければ、生起しつつあるというその生起など存在しない。それゆえ、生起しつつあるものもまた生起しない。

12.3 結論

以上のように、すでに生起したもの、まだ生起していないもの、生起しつつあるものはすべて成立しない。生起という存在（ダルマ）〔生法〕が成立しないのであるから、生は存在しない。住と滅もまた同様である。生・住・滅が成立しない以上、有為の存在もまた成立しない。^{←43)}

有為の存在が成立しないのであるから、無為の存在も成立しない。有為と無為の存在が成立しないのであるから、自我〔衆生 *sattva*〕もまた成立しない。それゆえ、「すべての存在は不生である」と理解しなければならない。完全に空寂だからである。

3 検討すべき問題点

a 第8章・第9章について

上に訳出した4章のうち、第8章と第9章は、既に訳出済みの第10章とともに、実体（自性）の否定によって諸法の空・不生を証明している部分であるが、第10章が、「有神論批判」という『中論頌』では明確に示されていなかった論点を中核にしているのに対して、第8章は、注4で指摘したように、『中論頌』

の第13章、第15章、および第24章の所説のうち、この第8章のテーマに必要な箇所を要約して示したものである。また、第9章に至っては、第3章で言及した「衆縁和合」について再確認するだけの極端に短い章であり⁴⁴⁾、全体を12章にするためにわざわざ設定したとしか思われぬものである⁴⁵⁾。

この2章のうち、特に問題になるのは、第8章の主題を提示した第21偈である。これは、注5で示したように『中論頌』一三・3の引用である。

bhāvānāṃ niḥsvabhāvatvam anyathābhāvadarśanāt /
asvabhāvo bhāvo nāsti bhāvānāṃ sūnyatā yataḥ // 3 //

これを、『青目註』は「諸法有異故 知皆是無性 無性法亦無 一切法空故」とし、『十二門論』は「見有変異相 諸法無有性 無性法亦無 諸法皆空故」とする。2漢訳の趣旨は、「あらゆる存在は、変異が見られるのであるから、自性というものはない。〔このように〕一切の存在は空なのであるから、「無自性」という存在さえもない」ということである。(上記の下線部について、『青目註』は比較的詳しく説明する⁴⁶⁾が、『十二門論』はまったく解説を加えない。)

注5で指摘したように、この第3偈に関しては、論主の主張と見る解釈（『青目註』『釈論』）と、敵者の反論と見る解釈（『無畏論』および仏護、清弁、月称の各注釈）があるが、前者に拠れば、「諸法は虚妄・虚偽である」という仏陀のことは「空性」を明らかにしたものである」という前2偈の内容を、この第3偈が無自性の観点から確認していることになる。これを『十二門論』は「観性門」（自性を考察する章）の主題偈としているのである。

一方、後者は、この偈をどう解釈しているだろうか。その代表として『無畏論』の所論を見てみよう。

諸存在に自性はない。他に変化することが見られるから。(3ab)
世尊が「虚妄」と仰ったのは、〔まったくの〕無であるとか、法に我（実体）がない（＝法無我 dharmanairātmya）とかいう意味ではなくて、諸存在にはブドガラという自性がない（＝人無我 pudgalanairātmya）という意味である。なぜかと言えば、〔青年 (yuvan) から老年 (jirṇa) というように〕他の段階へと変化することが見られるからである。

自性がないというような存在はない。なぜなら、諸存在は空だからである。(3cd)

法という自性がない⁴⁷⁾という存在はない。なぜかと言えば、諸存在が〔すべて全く〕空であるなら、法という自性が存在することは不合理だからである⁴⁸⁾。

まず、ab句では、〈「諸法は虚妄である」という世尊の言葉は「人無我」の意味であって、「法無我」の意味ではない〉という主張である。また、cd句は読みにくいところもあるが、「法という自性」を基体と見て説明していると思われる。つまり、くあらゆる存在は属性をともなった基体であり、かりにすべてが空というのであれば、空という属性の基体まで存在しないことになってしまうが、基体がないのにその属性（つまり、空という属性）が存することなどあり得ない〉という意味であろう⁴⁹⁾。

『十二門論』は、無自性・空であっても（いや、無自性・空だからこそ）世間道も出世間道も成立しうることをこの第8章のテーマにしている。だからこそ、それにふさわしい偈として『中論頌』一三・3を利用したのである。たとえば反論者の立場に立った偈であっても龍樹作の偈であればそれを利用するのが「著者」のやり方であるから、その解釈（8.2.1）においても第8章の以下の所論につながるものがあれば『無畏論』の釈を一部でも使ったであろうが、『無畏論』はもちろん、論主の偈とする『青目註』にもそのような釈はみられず、結局、注6～8で示したように、『中論頌』所収の数偈の要旨を利用して偈の説明に当てているのである。

b 第11章について

この章の全体の構成の概略を示せば、以下のようになる。

- 11.1 主題偈 『中論頌』一一・2などを参考に「著者」が作成
- 11.2.1 主張 『空七十論註』第6偈の釈を利用
- 11.2.2.1 反論 『廻諍論』第20偈の釈を利用
- 11.2.2.2 答論 『廻諍論』第69偈の釈の論法を利用

- 11.2.3.1 反論 『廻諍論』第69偈の釈中の反論を利用
- 11.2.3.2 答論 『廻諍論』第69偈の釈中に近似する論がある
- 11.3 結論 各章末尾に配される定型句

「利用」の程度には差があり、そのまま転用したと思われるものから、その多くに依拠したもの、さらにはその論法を踏まえたものなど様々であるが、この章の中核部分は『廻諍論』の反論者の偈（第20偈）とそれに対する論主の偈（第69偈）を使った問答となっていると言っていいであろう。『廻諍論』に関しては、松本 [1997] や Tola and Dragonetti [1998] がその龍樹真撰説を否定しており（とくに前者は『廻諍論』を5世紀頃の作品とする）、それを津田 [2006] が的確に要約して説明している⁵⁰⁾。上に示したように、この第11章が間違いなく『廻諍論』を「利用」している、と言えるのであれば、「著者」の思想的背景を知る上でも、また『廻諍論』の成立年代を考える上でも（4世紀半ばには成立していることになろう）、重要な資料になるはずである。

c 第12章について

既に注40で詳細に検討したように、この章の主題偈は、「著者」が『中論頌』七・14（『青目註』七・15）の内容を、『中論頌』二・1の形式を利用して作成した偈と考えられる。主題偈の前後の解説は「著者」自身のものであろうが、注43で示したように、本論（12.2）はその全体が（さらに結論（12.3）の一部も）『無畏論』七・14の釈を利用（流用）している。全体としては、やや簡略化して用いているが、『青目註』との関係も見ることができるので、『中論頌』七・14に対する釈をすべて、以下に3本を対照して示すことにする。最初の（X）と最後の（Y）の部分は『十二門論』にはない部分である。『無畏論』は注43に挙げておいたチベット文の和訳で示す。

(X)

『青目註』：生名衆縁和合有生。已生中無作故無生。未生中無作故無生。生時亦不然。

離生法生時不可得。離生時生法亦不可得。云何生時生。是事去來中已答。

『無畏論』：生が他を生起させるとき、すでに生じたもの（已生）として、まだ生じて

いないもの（未生）として、そして生じつつあるもの（生時）として生起の作用をもつ（utpādayati）⁵¹⁾と〔いう風に三つの場合に分けて〕考えた場合、〔これら〕三種の選言肢はいずれも、生起の作用をもつことはない。どのようにして生起の作用をもつことがないかは、すでに去ったもの（已去）、まだ去っていないもの（未去）、歩むもの（去時）によってそれらを〔「観已去・未去・去時品」第二において〕説明し終わっている。それがどのような内容か、というなら、〔以下に〕説明する。

A 12.2.1 「已生の不可得」① a

『十二門論』（是中生果不生者、）是生生已不生。何以故。有無窮過故。作已更作故。

『青目註』已生法不可生。何以故。生已復生。如是展轉則為無窮。如作已復作。

『無畏論』まず、すでに生じた存在（utpannabhāva）が、生起の作用をもつことはない。なぜかといえば、悪無限の過失が付随するからであり、すでになされたものになされるべきものはないからである。

B 12.2.1 「已生の不可得」① b

『十二門論』若生生已生第二生、第二生生已生第三生、第三生生已生第四生。如初生生已生第二生、如是生則無窮。是事不然。是故生不生。

『青目註』——欠——

『無畏論』すでに生じた存在が生起の作用をもつならば、二番目に生じたものは三番目を生起させるはずであり、三番目に生じたものは四番目を生起させるはずであり、そのようにして、先に生じたものとその後生じたもの〔の関係〕も同様になるであろう。もしそうなら、生は、終わりのないものになってしまうから、それは認められない（na abhimata）。それゆえ、すでに生じたものが生起の作用をもつことはない。

C 12.2.1 「已生の不可得」② a

『十二門論』復次若謂生生已生所用生生是生不生而生、是事不然。何以故。初生不生而生、是則二種生。生已而生、不生而生故。

『青目註』復次若生已更生者、以何生法生。是生相未生而言生已生者則自違所說。何以故。生相未生而汝謂生。若未生謂生者、法或可生已而生、或可未生而生。

『無畏論』すでに生じたものが生起の作用をもつと仮定した場合、すでに生起させられ

たと言われた生を、それとは別のある生が、〔それ自体は〕まだ生起していない状態で生起させたことになるから、その場合、「生じたものが生起の作用をもつ」という主張 (pratijñā) は成り立たなくなる。なぜかといえば、それは、最初、生じる以前はまだ生じていないのであって、その後、生起の作用をもつのであるから、したがって、あるものはすでに生じて生起の作用をもつのであり、〔別の〕あるものはまだ生じていないのに生起の作用をもつのであるから、相互に矛盾することになってしまうからである。

D 12.2.1 「已生の不可得」②b

『十二門論』汝先定説而今不定。如作已不應作、燒已不應燒、証已不應証。如是生已不應更生。是故生法不生。

『青目註』汝先説生已生。是則不定。復次如燒已不應復燒、去已應復去。如是等因緣故、生已不應生。

『無畏論』そのように認めると決定のないものになってしまうが、すでになされたものにはなされることはなく、焼けたものには焼けることはなく、去ったものには行くことはなく、悟ったものには悟ることはなく、生じたものには生起の作用はないのであるから、それゆえ、まず、そのように、生じたもの (utpannabhāva) はどんなものであれ生起の作用をもつことはない。

E 12.2.2 「未生の不可得」①a

『十二門論』不生法亦不生。何以故。不与生合故。又一切不生有過故。若不生法生則離生有生。是則不生。若離生有生、

『青目註』未生法亦不生。何以故。法若未生則不應与生縁和合。若不与生縁和合則無法生。若法未与生縁和合而生者、

『無畏論』まだ生起していないものもまた、生起の作用をもつことはない。なぜか。生 (utpāda) と結びついていないからである。また、すべての未生起なるものに生があるという過失があるからである。この場合、まだ生じていないものは、生とは結びついてはいないけれども生なる存在と結びつくことによって生起の作用をもつか、あるいはまた、生なる存在とは結びつくことなく生起の作用をもつか、〔二つの場合が〕考えられるが、

F 12.2.2 「未生の不可得」①b

『十二門論』則離作有作、離去有去、離食有食。如是則壞世俗法。是事不然。是故不生法不生。

『青目註』 応無作法而作、無去法而去、無染法而染、無恚法而恚、無癡法而癡。如是則皆破世間法。是故未生法不生。

『無畏論』 そのような場合、なされることなくしてなし、行くことなくして行き、食べることなくして食べ、貪欲なくして貪り、瞋恚なくして怒り、愚痴なくして愚かになることになってしまい、さまざまな世間の言語習慣 (vyavahāra) に反する (viruddha) から、それもまた認められない (na abhimata)。それゆえ、まだ生じていない存在が、生起の作用をもつことはない。

G 12.2.2 「未生の不可得」②

『十二門論』 復次若不生法生、一切不生法皆応生。一切凡夫未生阿羅漢三藐三菩提皆応生。不壞法阿羅漢煩惱不生而生。兔馬等角不生而生。是事不然。是故不應説不生而生。

『青目註』 復次若未生法生者、世間未生法皆応生。一切凡夫未生菩提、今応生菩提。不壞法阿羅漢無有煩惱、今応生煩惱。兔等無角今皆応生。但是事不然。是故未生法亦不生。

『無畏論』 また、もし、生じていない存在が生起の作用をもつのであれば、およそ生じていないもの全てが生じるという過失が付随することになる。その場合、全ての凡夫に、まだ生じていない悟りが生じるという過失が付随し、不動阿羅漢（もはや煩惱によって動乱させられることのない性質を獲得した阿羅漢）に、生じていない煩惱が生じるという過失が付随し、兔や馬などには角は生えていないが、それも生じるという過失が付随してしまうので、それは認められない。それゆえ、まだ生じていない存在が、生起の作用をもつことはない。〔その不合理さは〕煩惱が焼き尽くされた者に煩惱が生起するようなものである。

H 12.2.2 「未生の不可得」③

『十二門論』 問曰。不生而生者、如有因縁和合・時・方・作者・方便具足、是則不生而生。非一切不生而生。是故不應以一切不生而生為難。答曰。若法生時、方・作者・方便、衆縁和合生。是中先定有不生、先無亦不生、又有無亦不生。是三種求生不可得如先説。是故不生法不生。

『青目註』問曰。未生法不生者、以未有縁無作無作者無時無方等故、不生。若有縁有作有作者有時有方等和合故、未生法生。是故、若説一切未生法皆不生、是事不爾。
答曰。若法有縁有時有方等和合則生者、先有亦不生。先無亦不生。有無亦不生。三種先已破。是故、生已不生、未生亦不生。

『無畏論』この点に関して〔反論者が〕問うていう。生じていないものは、生起の作用をもつ。それは、直接的・間接的条件の結合（因縁和合）、場所、時間、作者、手段をそなえた場合に生起の作用をもつのであって、まだ生じていないものが〔それらの条件に関係なく〕全て、生起の作用をもつのではない。直接的・間接的条件の結合、場所、時間、作者、手段をそなえていなければ、生起の作用をもつことはないからである。それゆえ、生じていないものがすべて生じるという過失が付随することはない。

これに対して答えていう。直接的・間接的条件の結合、場所、時間、作者、手段をそなえたものが生起の作用をもつといわれた、そのことがあったとしても生起の作用をもつことはないし、〔そのことが〕ない場合も生起の作用をもつことはないし、あると同時にないとしてもまた生起の作用をもつことはない。〔有、無、有かつ無のこれら〕三種によるそれぞれの生起が不合理であることは〔第1章「観縁品」第7偈において〕すでに説明し終わっている。

それゆえ、まだ生じていないものが生起の作用をもつことはない。

I 12.2.3 「生時の不可得」①②

『十二門論』生時亦不生。何以故。有生生過、不生而生過故。生時法生分不生、如先説。
未生分亦不生、如前説。復次若離生有生時、則應生時生。而實離生無生時。是故生時亦不生。

『青目註』生時亦不生。何以故。（——欠——）已生分不生。未生分亦不生。如先答。
復次、若離生有 生時者、應生時生。但離生無生時。是故生時亦不生。

『無畏論』① 同様に、生じつつある存在（utpadyamānabhāva）もまた生起の作用をもつことはない。なぜかといえば、すでに生じたものが生起の作用をもつという誤謬におちいることになるからであり、まだ生じていないものが生起の作用をもつという誤謬におちいることになるからである。生じつつあるものは、先に説いたすでに生じたものの理由（hetu）によって、生起の作用をもつことはなく、

生じつつあるものは、先に説いたまだ生じていないものの理由によって、生起の作用をもつことはない。

② また、もし、生じつつあるものが生じることなく、にもかかわらず生じつつあるものが生起の作用をもつとすると、生じることのない生じつつあるものなど〔現実には〕目にすることはないのであるから、生じつつあるものは、生起の作用をもつことはない。

J 12.2.3 「生時の不可得」③④

『十二門論』復次若人説生時生、則有二生。一以生時為生、二以生時生。無有二法。云何言有二生。是故生時亦不生。復次未有生無生時。生於何處行。生若無行處則無生時生。是故生時亦不生。

『青目註』復次若言生時生者、則有二生過。一以生故名生時。二以生時中生。二皆不然。無有二法、云何有二生。是故生時亦不生。復次生法未発則無生時。生時無故、生何所依。是故不得言生時生。

『無畏論』③ 生じつつあるものが生起の作用をもつとすると、そこには、二つの生があるということになってしまう。生じつつあるものが生じつつあるものそのものとなるそれと、生じつつあるものが生起させるそれとである。ふたつの生というのは不合理である。二つの生じたものなど〔現実には〕存在しないからである。それゆえ、まだ生じつつあるものが生起の作用をもつことはない。

④ 生起を開始する以前には、将来生起を開始するような生じつつあるものなど、どこにも存在しない。生起を開始することがないときには、生じつつあるものは存在しないのであるから、生じつつあるものが生起の作用をもつことはない。

K 12.3 結論

『十二門論』如是生不生生時皆不成。生法不成故無生。住滅亦如是。生住滅不成故則有為法亦不成。

『青目註』如是推求、生已無生、未生無生、生時無生。無生故生不成。生不成故住滅亦不成。生住滅不成故有為法不成。

『無畏論』以上のように、すでに生じたもの、まだ生じていないもの、生じつつあるものは生起の作用をもつことはないのであるから、およそ生というものは成立しえない。生が成立しないのであるから、住と滅もまた成立することはない。生・

住・滅が成立しない以上、有為（作られたもの）もまた成立しない。

(Y)

『青目註』是故偈中説、去未去去時中已答。

『無畏論』そのように、それらのことは、「観已去・未去・去時品」第二において説明した、すでに去ったもの、まだ去らないもの、歩むもの〔の関係と同じもの〕として理解しなければならない。

全体的に見てこれら3つの資料は一見したところ同じテキストの異訳ではないかと思わせる程に近似している。とくにAJKは3本全同と見て良いだろう。DFもこれに準じるが、Dでは『無畏論』が「作・焼・去・証」の例を挙げるのに対して、『青目註』「焼・去」、『十二門論』：「作・焼・証」とし、Fでは『無畏論』が「作・去・食・貪瞋癡」の例を挙げるのに対して、『青目註』：「作・去・貪瞋癡」、『十二門論』：「作・去・食」としている点が、わずかだが異なる。またBIには『青目註』に欠落部分があり、また、Gには『無畏論』にのみ見られる句がある（破線部）が⁵²⁾、これは、後に付加されたものと思われる。

残りのCEHにおいても『無畏論』と『十二門論』はほぼ同じだが、『青目註』は異なる部分を含んでいる。このうち、まずCであるが、前半に「以何生法生（どういう生のダルマによって生起するのか）」という疑問文を挿入しており、後半では、『無畏論』『十二門論』が〈相互に矛盾する2種の生があることになる〉とするのに対して、『青目註』は〈君が言うように生のすがたが無くても生起するなら、その生（というダルマ）は生起し終わって他を生起させるのか、自身は生起しないで他を生起させるのか〉という択一式の詰問になっている。これは同じ文献からの直訳と意識の違いと見なすことも出来るが、少なくともものの生起一般の否定をテーマとする『十二門論』が利用できる説明の仕方ではないと言えよう。Eにおいても、『青目註』において他の2本と異なる部分（下線部）が見られるが、これも、先のCの場合と同様で、意識による違いと見なせるかも知れない。

一方、Hにおいては、『無畏論』と『十二門論』とで『無畏論』の二重下線

部が『十二門論』に欠けているだけで他は殆ど同じであるのに対して、『青目註』は、下線部が『無畏論』とは異なる。反論者の問いにおいて、『無畏論』も『十二門論』もく生じていないものが生起するのは様々な条件が整った場合に生起するのであって、まだ生じていないものがそれらの条件に関係なく全て生起してくるわけではない」としているのに対して『青目註』はく生じていないものが生起しないのは様々な条件が整っていないからであって、様々な条件が整えば生起するのであるから、すべてのまだ生じていないものが生起しないとするのは正しくない」としている⁵³⁾

このように見てくると、この第12章でも、やはり『十二門論』は、『無畏論』と『青目註』を比べた上で、『無畏論』に依拠して全体を構成していると言っていていだろう。（ただし、常に配慮しておかなければならないのは、『無畏論』や『青目註』はものの生起を可能にする「生」というダルマの生起を論じているのに対して、『十二門論』はものの生起一般の否定を証明する意図で『無畏論』の釈を利用している点である。）

4 おわりに

これで、『十二門論』（全12章）の和訳と訳註が完成したことになる。これらの訳註によって『十二門論』がどのような文化的環境、思想的系譜の中にあるかが想像できるのではないだろうか。『中論頌』の古註が作成され、『空七十論』（正確には『空七十論註』とすべきだろう）や、おそらく『廻諍論』が成立していた時代である。インド思想史の中では、『サーンキヤ・カーリカー』や『ニヤーヤ・スートラ』がその形を整え（それらに対するいくつかの注釈も知られ）、有神論が優勢になっていた時代でもある⁵⁴⁾。2つの古註（『無畏論』と『青目註』）の利用の仕方やその他の諸文献の扱い方から見て、『十二門論』の「著者」（というより「編集者」）は「訳者」たる鳩摩羅什と考えるべきであろう。「著者」問題について、また、『十二門論』が龍樹作とされる著作群（「龍樹文献群」）の中でどのような位置にあるかについて、別稿（五島 [2012 b]）で論じている⁵⁵⁾ので、そちらを参照願いたい。

〔略号〕

- ABh* : *Akutobhayā*, Tib: dBu ma rtsa ba'i 'grel pa ga las 'jigs med, Derge ed. Tohoku No. 3829 (dBu-ma Tsha 29b1-99a1). Peking ed. Otani No.5229 (dBu-ma Tsa 34a2-113b8).
- AKBh* : *Abhidharmakośabhāṣya* of Vasubandhu, P. Pradhan (ed.), revised second edition with introduction and indices by A. Haldar, Patna, 1975.
- CS* : *Āryadeva's Catuḥśataka* on the Bodhisattva's Cultivation of Merit and Knowledge, Karen Lang, Indiske Studier VII, Copenhagen, 1986.
- Pb* : *Madhyamakavyūtiḥ, Mūlamadhyamakārikās de Nāgārjuna avec la Prasannapadā Commentaire de Candrakīrti*, par Louis de la Vallée Poussin, St.Petersburg, 1913.
- ŚS* : *Śūnyatāsaptati*, Tola and Dragonetti [1987], [1995] ch.3, pp.53-99; Lindtner [1982] pp.31-69.
- ŚSV* : *Śūnyatāsaptativṛtti*, sTong pa nyid bdun cu pa'i 'grel pa, Derge ed. Tohoku No. 3831 (Taipei No.3836) dBu-ma Tsa 110a4-121a4; Peking ed. Otani No.5231 dBu-ma Tsa 126a5-138a7; Golden Manuscript Tenjur No.3230.
- VV* : *The Dialectical Method of Nāgārjuna Vīgrahavyāvartanī*, Translated from the original Sanskrit with Introduction and Notes by Kamaleswar Bhattacharya, Text critically edited by E. H. Johnston and Arnold Kunst, 2nd ed.1986 ; Yonezawa [2008].

〔参照文献〕

- 秋本 勝 [2003] : 「*Abhidharmadīpa* : 「三世実有説」和訳 (未完)」『瓜生津隆真博士退職記念論集 仏教から真宗へ』永田文昌堂、35-45頁。
- 瓜生津隆真 [1974] : 「空七十論」『大乘仏典 龍樹論集』中央公論社、89-132, 373-377頁。
- 梶山雄一 [1974] : 「廻諍論」「ヴァイダルヤ論」『大乘仏典14 龍樹論集』中央公論社、133-229, 378-399頁。
- [1984a] : 「詭弁とナーガールジュナ」『理想』第610号、112-125頁。
- [1984b] : 「仏教知識論の形成」『講座・大乘仏教9 認識論と論理学』春秋社、1-101頁。
- 桂 紹隆 [1998] : 『インド人の論理学』中央公論社。
- 木村宣彰 [2009] : 『中国仏教思想研究』法蔵館。
- 五島清隆 [2002a] : 「『十二門論』の冒頭偈について」『種智院大学研究紀要』第3号、79-104頁。
- [2002b] : 「『十二門論』の構成と著者問題」『櫻部建博士喜寿記念論集 初期仏教からアビダルマへ』平楽寺書店、447-465頁。
- [2002c] : 「『十二門論』に見る主宰神否定論——苦の由来をめぐって——」『基督教研究』(同志社大学神学部基督教研究会)第65巻第1号、46-72頁。
- [2003] : 「『十二門論』における縁起思想——第1章「観因縁門」を中心に——」『種智院大学研究紀要』第4号、48-70頁。

- [2004]: 『『十二門論』と龍樹・青目・羅什』『印度学仏教学研究』第53巻第1号、380-376頁。
- [2005a]: 「仏典における「十二門」の用例と意義について——『十二門論』の書名との関連で——」『種智院大学研究紀要』第6号、55-71頁。
- [2005b]: 「『十二門論』における因中有果論・無果論の否定（1）」『頼富本宏博士還暦記念論文集』（下巻）、49-62頁。
- [2007]: 「『十二門論』と龍樹・青目・羅什(2)——特に青目について——」『印度学仏教学研究』第55巻第2号、932-926頁。
- [2008]: 「龍樹の縁起説(1)——とくに相互依存の観点から——」『南都佛教』第92号、1-37頁。
- [2009a]: 「『十二門論』における因中有果論・無果論の否定（2）」『仏教学会紀要』第15号、29-51頁。
- [2009b]: 「龍樹の縁起説(2)——とくに十二支縁起との関連から——」『南都佛教』第93号、1-37頁。
- [2012a]: 「『十二門論』和訳と訳註（第3章～第7章）」『佛教大学 仏教学部論集』第96号（予定）。
- [2012b]: 「ナーガールジュナ作『十二門論』とその周辺」『シリーズ・大乘仏教 第6巻 中観と空』春秋社（予定）。
- 津田明雅 [2006]: 『Catuḥstava とナーガールジュナ——諸著作の真偽性』(学位論文、京都大学文学研究科)。
- 本多 恵 [1999]: 『ニヤヤー経註』平楽寺書店。
- 松本史朗 [1997]: 『チベット仏教哲学』大蔵出版。
- 三宅伸一郎 [2000]: Comparative Table of the Golden Manuscript Tenjur in the dGa'-ldan Monastery with the Peking Edition of Tenjur, 『真宗総合研究所研究紀要』第17号、1-65頁。
- 村上真完 [1998]: 「人格主体論（靈魂論）俱舍論破我品訳註（一）」『塚本啓祥教授還暦記念論文集：知の邂逅——仏教と科学』永田文昌堂、27-292頁。
- Erb, Felix [1997]: *Śūnyatāsaptatīrtti : Candrakīrtis Kommentar zu den "Siebzig Versen über die Leerheit" des Nāgārjuna (Kārikās 1-14)*: Einleitung, Übersetzung, Textkritische Ausgabe des Tibetischen und Indizes, Tibetan and Indo-Tibetan Studies 6, Stuttgart.
- Huntington, C. W. [1986]: The *Akutobhayā* and Early Indian Madhyamaka, Vol.I II, Ph.D. diss., The University of Michigan.
- Lindtner, Christian [1982]: *Nagarjuniana, Studies in the Writings and Philosophy of Nāgārjuna*, Indiske Studier IV, Copenhagen.
- Pandeya, Raghunath [1981]: *The Madhyamakaśāstram of Nāgārjuna with the Commentaries Akutobhayā by Nāgārjuna, Madhyamakavṛtti by Buddhapālita, Prajñāpradīpavṛtti*

by *Bhāvaviveka, Prasannapadāvṛtti by Candrakīrti Critically Reconstructed*, Volume 1, Delhi.

Siderits, Mark and Katsura, Shoryu [2008] : “*Mūlamadhyamakārikā XI-XXI*”, 『インド学チベット学研究』 Vol.12, pp.170-221.

Tola, Fernando and Dragonetti, Carmen [1987] : “*Śūnyatāsaptati – the Seventy Kārikās on Voidness (According to the Svavṛtti) of Nāgārjuna*” *Journal of Indian Philosophy* Vol.15, pp.1-55.

——— [1995] : *On Voidness*, Delhi.

——— [1998] : “Against the Attribution of the *Vigrahavyāvartanī* to Nāgārjuna”, *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens*. Vol.42, 151-166.

Yonezawa, Yoshiyasu [2008] : “*Vigrahavyāvartanī*, Sanskrit Transliteration and Tibetan Translation”, 『成田山仏教研究所紀要』 Vol.31, pp.209-332.

Westerhoff, Jan [2010] : *The Dispeller of Disputes : Nāgārjuna’s Vigrahavyāvartanī*, Translation and commentary, New York.

〔注〕

1) 五島 [2002a] [2002b] [2002c] [2003] [2004] [2005a] [2005b] [2007] [2009a] [2012a]。

2) 第1章：五島 [2003]、第2章：[2005b] [2009a]、第3～第7章：[2012a]、第10章：[2002c]。

3) 底本には『大正新脩大藏經（以下、Taisho）』第30卷（No.1568 159a-167c）を使用した。〔大〕は大正藏經の本文の読み、〔三〕は脚注に挙げられる宋・元・明の三版に共通の読みを示す。翻訳にあたっては、必要に応じて原文の漢語を〔 〕内に示し、理解に資すると思われる場合はその原語として想定されるサンスクリットもそこに表示することとする。その他、〔 〕は語句の補充、（ ）は語句の説明、「 」は直接的引用、〈 〉は趣意・要約を示す。また、『中論頌』七・4は、『中論頌』第7章の第4偈を示す。なお、脚注番号が指示する箇所が長い場合、その範囲を明確に示すために、例えば、^(1→……→1)と表記する。この番号は、当該範囲の最後にくるべき番号で示される。

『無畏論』(*ABh*)のチベット訳テキストに関しては、D：デルゲ版、G：ガンデン寺所蔵金写テンギュール（三宅 [2000] 参照）、H：Huntington [1986]、P：北京版の略号を用いる。『空七十論註』（龍樹自註 *ŚSV*）についても D, G, P の略号を用いる。また『空七十論』（*ŚS*）に関しては、Tola and Dragonetti [1987] を主とし、Lindtner [1982] での対応頁も示す。前者は龍樹自註に引かれる偈をデルゲ・北京版で校合したものの、後者はカーリカー（Peking ed. No.5227, K と表示）と『空七十論註』所収の偈（Peking ed. No.5231, V と表示）とを北京・ナルタン版で校合したものである。Tola and Dragonetti [1995] は [1987] の再録である。なお、月称釈の『空七十論註』（第1～第14偈）の精密なテキスト・注に Erb [1997] があるが、本論では龍樹自註とそこに引用さ

れる本頌を研究の対象としているので、読みの異同について参考にはしていない。『廻諍論』（VV）は、JohnstonとKunstによるテキストを底本とする。Yonezawa [2008]はウメ文字写本のローマ字化テキストとチベット訳校訂テキストを対照したものであるが、本稿が論じる箇所に限れば内容的に大きな相違はないので、異同の注記は最低限にとどめる。（なお、五島 [2009b] 32-33頁注55は底本とYonezawa本との関係を第22偈とその釈に即して検討している。）Westerhoff [2010]はYonezawa [2008]に基づく英訳とその詳細な注解であるが、本稿では訳は基本的には梶山 [1974]に拠った。

- 4) 「観性門」とは「自性 (svabhāva) を考察する章」の意。第6章では相と可相の不成立を論じ、第7章では有為の四相の不成立を生成と衰滅の観点から論じたが、およそ相（特徴、属性）を論じる際には、その奥にその相の基体、つまり何らかの独立不変の実体を想定せざるをえない。それを自性と呼ぶが、本章ではその自性も成立しえないことを論証する。また、諸法空、無自性の教えは、決してニヒリズムなどではなく、むしろ世間的慣行や修行道の成立を説明するものだとする。『中論頌』第13章「形成作用（行）の考察」、第15章「自性の考察」、および第24章「〔四〕聖諦の考察」に内容上重なる。
- 5) この偈は『中論頌』一三・3の引用。冒頭の偈にふさわしく「諸法の空、無自性」を端的に述べたものだが、『青目註』（漢訳『中論』）『釈論』（安慧釈『大乘中觀釈論』）では論主の偈とし、それ以外の『無畏論』および仏護、清弁、月称の各注釈では、反論者の偈とする。詳しくは本文の第3節で検討する。
- 6) 『中論頌』一三・4 cd「もしも自性が存在するとするならば、変異すること (anyathābhāva) は何ものに存在するのだろうか」と同趣旨。『青目註』では5 abに相当し、「若し諸法に性有らば云何にして而も異なるを得ん」とする。
- 7) 『中論頌』一五・1の内容に合致する。それによれば、定性および性はsvabhāva（自性）、衆縁はpratyayaḥetu（縁と因）、作法はkṛtaka（作られたもの）の訳語に相当する。『青目註』一五・1の釈は、「若し諸法に性有らば、応さに衆縁より出づべからず。何を以ての故に。若し衆縁より出でなば、即ち是れ作法にして定性有ること無ければなり」とし、その措辞はほぼ合致する。『中論頌』二四・16にも類似の所論がある。
- 8) 『中論頌』一五・2 cdに〈自性 (svabhāva) とは作られたもの (kṛtrima) ではなく、他に依存しない (nirapekṣaḥ paratra) ものである〉とある。
- 9) この反論者の問い全体が、『中論頌』二四・1～6の趣旨を散文でまとめたもの。『青目註』二四・6の釈に「若し空法を受けば則ち罪福と及び罪福の果報とを破し、亦た世俗法を破す。是くの如き等の諸もろの過有るが故に、諸法は応さに空なるべからず」とある。
- 10) 『中論頌』二四・8と同趣旨。
- 11) 『中論頌』二四・10と同趣旨。
- 12) 『中論頌』二四・9に〈二諦の区別を知らない人は、仏陀の教えにおける深遠な真実義 (gambhiratattva) を知ることがない〉とある。
- 13) 『中論頌』二四・18abに「およそ縁起なるもの (yaḥ pratīyasamutpādaḥ)、それを、われわれは空性 (śūnyatā) と説く」とある。羅什は前半を「衆因縁生法」と訳す。この

注13が示す『十二門論』の本文（「是因縁法無自性故我説是空」）は、この部分だけを見れば「これらの縁によって生じた諸々の存在（*pratityasamutpannāḥ dharmāḥ*）には自性がない（*niḥsvabhāvāḥ*）から、私は、それを空（*sūnyāḥ*）と説くのである」とすべきかもしれないが、直前の文や『中論頌』二四・18abとの関係から、諸仏が説く法則としての「縁起」と同じものを指すものとしておく。『中論頌』自体においては、*pratityasamutpāda* は *sūnyatā* に等置される法則性を示すことばであるが、帰敬偈では、「不生不滅」のいわゆる八不で説明される個々の存在（法 *dharma*）のありようを総括することばとしても用いられている。「縁起（*pratityasamutpāda*）」の語に見られる四つの側面や『中論頌』における用例については、五島 [2009b] 2-9頁参照。また、羅什は縁起やそれに関連する語（たとえば *pratityasamutpāda*, *pratityasamutpanna*, *pratyayasamḥbhūta* など）を一貫性なく様々に訳している（たとえば因縁生法、從衆縁法、從縁生法、因縁法、縁法、因縁など）が、これに関しては、五島 [2003] 55-56頁参照。

- 14) 『中論頌』二四・20～25と同趣旨。
- 15) 〔大〕果とあるが、〔三〕法にしたがう。
- 16) 『中論頌』二四・25～30と同趣旨。また、『廻諍論』第54偈の釈および第70偈の釈（梶山 [1974] 172頁、183-184頁）参照。なお、本文中の「もし得と向の者がなければ、仏陀はない。縁起 [因縁法] を否定するから教え [法] はない」は、『中論頌』ではく八賢聖（四向四果）がなければ教団はない。〔四〕聖諦がないから正しい教えもない」とある。
- 17) 『中論頌』二四・33～35と同趣旨。
- 18) 『中論頌』二四・38に、「自性というものがあるなら、種々の状態というあり方を失ってしまった世間（*vicitrābhir avasthābhiḥ svabhāve rahitaṃ jagat*）は生じることもなく滅することもなく、常住不動（*kūṭastha*）のもの、ということになろう」とある。
- 19) 『中論頌』一五・3 abと同趣旨。なお、『青目註』一・4の釈に「自性無きが故に、他性も亦た無し。何を以ての故に。自性に因りて他性有り、他性とは他に於いて亦た是れ自性なればなり。若し自性を破せば、即ち他性を破するなり」とある。
- 20) 『中論頌』一五・3 cdと同趣旨。
- 21) 『中論頌』一五・4 abと同趣旨。
- 22) 『中論頌』一五・5 abと同趣旨。
- 23) 『中論頌』一五・6に「自性と他性、存在と非存在を見る者は、仏陀の教説において、真実を見ない」とある。
- 24) 「観因果門」とは「因（*hetu*）と果（*phala*）を考察する章」の意。第3章・第4章で因と果が成り立ちえないことをすでに論証したが、ここでは個々においても集合においても果が不成立であることを確認する。
- 25) この偈に直接該当するものは『中論頌』中には見出せないが、前半は『中論頌』二〇・1～4、後半は『中論頌』一・12、14（『青目註』14、16）の所論と重なる。

上掲の諸偈のうちとくに二〇・3は、「因と縁の集合によって結果が存在するのであれ

ば、〔結果は〕集合において把握されるはずだが、集合においては把握されない」(hetoś ca pratyayānām ca sāmāgryām asti cet phalam / gr̥hyeta nanu sāmāgryām sāmāgryām ca na gr̥hyate //) とあり、本論第22偈の前半の内容に相当する。また、一・12は、「もしそれ(結果)が〔諸々の縁のなかに〕存在していないとしても、〔それが〕それら諸々の縁から現れるとするなら、どうして諸々の非縁からもまた現れることがないであろうか」(athāsad api tat tebhyaḥ pratyayebhyaḥ pravartate / apratyayebhyo 'pi kasmān nābhipravartate phalam //) とあり、本論第22偈の後半の趣旨に重なる。五島 [2002a] 91頁参照。

- 26) 第3章「観縁門」冒頭で、『中論頌』一・11(『青目註』13)を引用し、その釈に、「壺などの結果は、一つ一つの条件の中には存在しない。〔さまざまな条件の〕集合〔和合 samudita〕の中にもまた存在しない。もし、これら〔個別と集合の〕二つの選言肢〔二門 vikalpa〕において〔結果が〕存在しないのであれば、どうして「〔結果が〕条件から生起する」と言えようか。」とある。
- 27) 『中論頌』二〇・1～4の所論によれば、衆縁和合は hetoś ca pratyayānām sāmāgrī (一因と諸縁の集合)の訳語。後の唯識の体系では和合(sāmāgrī)は二十四不相応行法の一つとされる。功は功能(samartha)の意で、結果を生ずるはたらきのこと。
- 28) 「観三時門」とは「三つの時間(trikāla)を考察する章」の意。「三つの時間」とはふつう、過去・現在・未来を指し、『中論頌』第19章「時間の考察 kālāparīkṣā」ではこの三者の関係を論じているが、ここでは、原因と結果の関係を前時・後時・同時の「三時」の観点から論じる。これまでの章では果に重点をおいていた論点を、ここでは因においてその不成立を論証する。「三時不成」をめぐる龍樹とニヤヤー学派の論争については、梶山 [1984b] 35-37頁、桂 [1998] 174-186頁参照。
- 29) dharmāḥ sahetukāḥ の訳語。「因をともなうもの」の意で、結果の意。ただし、「結果」とせず、わざわざ「有因」とするのは、この「因(hetu)」に「理由・根拠」の意味も見ているからである。これによって、同時の因果つまり論理的な関係をも論じることができる。

このことばを含む偈が仏陀のことばとして『俱舍論』「破我品」に引用される(AKBh p.466.8-9)。

ātmaiva hy ātmano nāsti viparītena kalpyate /
nāstīha sattva ātmā vā dharmās tv ete sahetukāḥ //

なぜなら、自分には我(アートマン)そのものがない。顛倒した者が〔我ありと〕妄想するのである。ここには、人も我もない。これらの法(諸要素)は因を伴っている。

この偈の cd 句は『プラサンナパダー』にも引用されている(Pp p.355.4)。この偈は『瑜伽師地論』や『ユクティ・ディーピカー』にも引用されている(村上 [1993] 290頁注(40)参照)。

- 30) この偈に直接該当するものは『中論頌』中に見出せないが、ab 句は『中論頌』一一・

2 cd 「それ故、ここでは、前 (pūrva) と後 (apara) と同時 (saha) という次第 (krama) は成り立たない」に近い。ただしこの第11章は「〔輪廻における〕前後の究極を考察する章 (pūrvāparakoṭīparikṣā)」であり、時間一般ではなく、輪廻の中における老死と生の前後関係を論じたものである。なお、この偈に内容的に近いのは注32で検討する『空七十論』第6偈であろう (五島 [2002a] 参照)。

31) この部分は、次注で取り上げる『空七十論註』の部分には見られないが、本文のように、因果の同時不成立の喩例としてよく用いられる。また、『ヴァイダルヤ論』の認識方法と認識対象の三時 (前・後・同時) における不成立を論ずる中にも、「またもし、〔両者が〕同時にある、と言うとしても、それは不可能である。たとえば、同時に生じて〔併存する〕牛の二つの角が原因と結果として〔関係すること〕は不合理であるようなものである」とある (梶山 [1974] 194頁)。

32) この部分は『空七十論』第6偈の龍樹自註 (『空七十論註』) の下線部と内容的に合致する。

結果があるなら、結果をもつ原因がある。それ (結果) がないなら、原因でないものと同じになる。〔結果が〕あるのでもなくないのでもないなら、矛盾する。〔先・後・同時の〕三時のいずれのばあいにも〔原因は〕認められない。(第6偈)

結果があるなら、原因は結果をもつものとなる。その結果がないなら、〔その場合の原因とは〕原因でないものと同じになるであろう。結果があるのでもなく、ないのでもないというのは矛盾であって、〔結果の〕あることとないことがまったく同時にあることはない。さらに、〔先・後・同時の〕三時にわたっても原因は認められないのである。どのようにしてか。まず、もし原因が〔結果よりも〕先に固定しているなら、何ものの原因であるのか。〔つぎに〕そうではなくて〔結果より〕のちに固定するのであるならば、すでに〔結果として〕成立してしまっているものに対していかなる原因が必要であろうか。〔さらに〕そうでなくて、原因と結果〔との両者〕が同時に固定するならば、同時に生ずる原因と結果との両者は、どちらがどちらの原因であり、どちらがどちらの結果であるのか。かくて〔先・後・同時の〕三時いずれにおいても原因は認められない (na upapadyate)。 (瓜生津 [1974] 94-95頁)

'bras yod 'bras dang ldan pa'i rgyu // de med na ni rgyu min mtshungs //
yod min med pa min¹ na 'gal // dus gsum rnam su'ang² 'thad ma yin // 6 //

'bras bu yod na 'bras bu dang ldan pa de rgyu yin no // 'bras bu de med na ni rgyu ma yin pa dang mtshungs par 'gyur ro // 'bras bu yod pa yang ma yin med pa yang ma yin pa ni 'gal te / med pa dang yod pa dus gcig kho na³ yod pa ni ma yin no // gzhan yang⁴ dus gsum du yang rgyur 'thad pa ma yin no // ji ltar⁵ zhe na / re zhig gal te rgyu snga bar brtags⁶ na ni gang gi rgyu yin / 'on te phyi mar⁷ brtags⁸ na ni grub zin pa la rgyu ci dgos / 'on te rgyu dang 'bras bu cig car yin par brtags⁹ na ni rgyu dang 'bras bu cig car skyes pa gnyis gang gi rgyu gang yin /¹⁰ gang gi 'bras bu¹¹ gang yin / de ltar dus gsum char¹² du yang rgyur mi 'thad do // (SSV D 221.3-6, G 168b5

-169a3, P 127a6-127b2) 1) DGP: yin. Read min. 2) GP: su'ang. D: su. 3) D inserts: ni. 4) DG insert: /. 5) GP: ltar. D: Ita. 6) D: brtags. GP: brtag. 7) D: phyi mar. GP: 'phyi bar. 8) D: brtags. GP: brtag. 9) D: brtags. GP: brtag. 10) G omits: /. 11) GP insert: ni. 12) D: car. GP: char.

33) 『廻諍論』第20偈とそれに続く解説にほとんど合致する。それによれば、破は *pratiṣedha* (否定)、可破は *pratiṣedhya* (否定されるもの) に相当する。『廻諍論』のこの部分は、実在論者たるアビダルマ哲学者が中観論者に対して「空の理論によつてものの自性・本体を否定することは不合理だ」と反論した箇所と考えられている(梶山 [1974] 423頁)。

『廻諍論』第20偈とその解説は以下の通り(下線部が『十二門論』の対応箇所)。

否定が先であつて、否定されるものが後にあるということはありえない。否定が後で〔否定されるものが先で〕あつても、〔両者が〕同時にあつても、〔否定は〕成り立たない。そういうわけで、本体はあくまであるのである。(第20偈)

この〔本体がないという〕否定について、否定が先であつて、否定されるものがあとにあるということはありえない。なぜなら〔否定があるときには、まだ〕否定されるものがないのであるから、いったい何を否定するというのか。また、否定があつて、否定されるものが先にあるということもありえない。否定されるものが先にすでに存在してしまっているときに、否定は何をなすことができよう。さらに、否定と否定されるものとが同時に存在するとしても、否定は否定されるものに対する作用原因 (*kāraṇa*) とはならないし、否定されるものが否定に対する作用原因ともならない。〔同時に存在する二つのもの間に作用がないことは〕たとえば、牛*〔の頭〕に同時に生じている二つの角のうち、右の角は左の角に対する作用原因でもなく、左の角が右の角に対する作用原因でもないようなものである。したがつて、「すべてのものは本体をもたない」と言うことは正しくない(梶山 [1974] 149-150頁, Westerhoff, [2010] pp.26-27)。(*テキストは「兎 (*śaśa*)」だが、Yonezawa [2008] により「牛 (*go*)」とする。蔵訳は *ri bong* (兎)、漢訳は単に「角」とするのみ (Taisho Vol.32 17c12)。

*pūrvam cet pratiṣedhaḥ paścāt pratiṣedhyam ity anupapannam /
paścāc cānupapanno yugapac ca yataḥ svabhāvaḥ san // 20 //*

*iha pūrvam cet pratiṣedhaḥ paścāc ca pratiṣedhyam iti nopapannam / asati hi
pratiṣedhye kasya pratiṣedhaḥ / atha paścāt pratiṣedhaḥ pūrvam pratiṣedhyam iti ca
nopapannam / siddhe hi pratiṣedhye kiṃ pratiṣedhaḥ karoti / atha yugapatpratiṣed-
hapratiṣedhya iti tathāpi na pratiṣedhaḥ pratiṣedhyasyārthasya kāraṇam, pratiṣedhyo
na pratiṣedhyasya ca, yathā yugapadutpannayoh śaśaviśānāyor naiva dakṣiṇam
savyasya kāraṇam savyam vā dakṣiṇasya kāraṇam bhavatīti / tatra yad uktaṃ
niḥsvabhāvāḥ sarvabhāvā itī tan na / (VV p.54.5-17, Yonezawa [2008] pp.248-249)*

なお、類似の論題が『ニヤーヤ・スートラ』5・1・18～20で論じられている。参考のため、5・1・18のヴァーツヤーナの註をあげておく。

「理由 (*hetu*) は証明するもの (*sādhana*) である。それは証明されるものより以前で

あるか、以後であるか、同時であるか〔のいずれか〕であろう。もしも証明するものが以前にあるなら、証明されるものが存在しない時、何を証明するのか。また、もしも以後であるなら、証明するものが存在しない時、これは何について証明されるものなのか。また、もし証明されるものと証明するものが同時であるなら、存在しつつある二者のうち、何が何を証明するのか。〔また〕何が何について証明されるのか。故に、理由は非理由 (ahetu) と差異がない。非理由と同性質であることに基づいて反対するのが、非理由の点で〔主張と〕等しい〔誤った非難〕である」(本多 [1999] 304-305頁)

34) 〔大〕我とあるが、〔三〕汝にしたがう。

35) ここは、〈「否定と否定されるものの関係は以前・以後・同時の三時において成立しえない」という君たちの主張こそ、我々の空の主張そのものであり、君たちは私たちの主張を支持したことになるのだ〉の意。11.2.3.1節の反論者が挙げる「三時成立の実例」は、注37で説明するように『廻諍論』の論を踏まえたものと思われるが、そこでは論主は「もしそうであれば、君は否定がほんとうにありうることを承認することになり (pratiṣedhasadbhāvas tvayābhyupagamyate)、君は自分の主張と矛盾する (pratijñāhāni ca te bhavati) ことになる。このようなわけで、本体の否定も成り立つことになる」(梶山 [1974] 183頁) と言っている。このように相手を「認許他難 (matānujñā 相手の意見を承認してしまうこと)」という論理学上の「敗北の状態」に追い込む論法は『廻諍論』『ヴァイダラヤ論』によく見られる論法である(梶山 [1984a] 116頁参照)。なお、注33で指摘した『廻諍論』第20偈に対する反論としてあげられた第69偈の解説中に、「三種の時間的關係の否定 (trikalāpratiṣedha) を述べるこの論拠 (hetu) は、君たちにはなく、〔われわれ〕空性を論じる者にこそあてはまる。なぜなら、〔われわれこそが〕すべてのものの本体を否定するのである (sarvabhāvasvabhāvapratīṣedhaka) から」とある(梶山 [1974] 182頁)。なお、同じ論法は『十二門論』第2章「観有果無果門」(2.3.2 ④) にも見られる(五島 [2009a] 35-36頁)。

36) 〈眼で見て経験的に知られる〉ということ。前注所掲の『廻諍論』に *drṣṭaḥ* (見られた) とある。『青目註』『無畏論』の第1章にある、世間眼見、*jig rten na mthong ba* (*lokadrṣṭa*) に相当する。

37) この所論は、「先時の因」の例を「瓶に対する陶師」とする以外は、以下に挙げる『廻諍論』第69偈の説明に合致する。ただし、『廻諍論』では、反論者の論点は「否定」が三種の時間において成立することにあるのに対して、『十二門論』ではここから「因果関係一般」に関する論に切り替わっている。

あるいは、君 (= 反論者) は次のように考えるだろう。「否定は三種の時間のいずれにおいても成り立つ—— (否定されるものに対して) 先にある (否定的) 根拠 (hetu) もありうるし、後にある根拠も、同時にある根拠もあるのだ。そのうち、先にある根拠というのは、息子に対する父のようなものである。後にあるものは、師匠に対する弟子のようなもので、同時的なものとは、照明に対する灯火のような場合である」と。(梶山 [1974] 183頁, Westerhoff [2010] p.41)

atha manyase triṣv api kāleṣu pratiṣedhaḥ siddhaḥ, dṛṣṭaḥ pūrvakālino 'pi hetuḥ, uttarakālino 'pi, yugapatkālino 'pi hetuḥ, tatra pūrvakālino hetur yathā pitā putrasya, paścātkaḥ yathā śiṣya ācāryasya, yugapatkālino yathā pradīpaḥ prakāśasyeti …… (VV p. 84.4-8, Yonezawa [2008] pp.328-329)

『廻諍論』での「父と息子」の関係が『十二門論』で「陶師と瓶」の関係に変えられたのは、「父と息子」では、因果関係としては父が息子の原因 (hetu) だが、論理的関係では息子が父の根拠 (hetu) となるため (弟子と師の関係と同じことになり)、先時の因としては不適切と判断したからであろう。同じ『廻諍論』に次のような詩頌がある (梶山 [1974] 168頁)。

もし父によって息子は生じさせられ、またその同じ息子によってその父が生じさせられるのなら、その際、いずれがいずれを生じさせるかを言え。(第49偈)

「父と子」「灯火と証明」の関係は、後の中観派の文献では「相互依存の縁起」の典型例として用いられるが、『廻諍論』や『宝行王正論』にはいわゆる「相互依存の縁起」の考え方は見られない (五島 [2008] 参照)。

なお、アビダルマでは、「父と息子 (pitṛputra)」「師と弟子 (guruśiṣya)」は、「作者と作用 (kartṛkriyā)」などとともに、「存在のあり方が〔相互〕依存的 (sattvāpekṣā) であるもの」と考えられている (秋本 [2003] 42-43頁)。

- 38) 「同時の因の成立」(A) を論証しようとして「灯火と明るさ」(B) の実例をあげても、灯火の発生と同時に明るさの発生があるのだから、両者の間に因果関係が成り立つかどうかそもそも疑わしく、Bの実例は論証を要する点で論証さるべき (sādhyā) Aと差異がない (sama)、ということ。空性によって論争・解説がなされる場合、どのような反駁・非難も所立相似 (sādhyasama 羅什訳=同疑因) となって成立しえないのであるから、前時・後時についても同疑因になることは言うまでもない。『廻諍論』第69偈の解説に次のようにある。

三種の時間的關係に対する否定をあらわす〔君の〕論拠は、すでに批判済みであると、考えるべきである。なぜかという、それ自体が証明されねばならぬことに等しいから (梶山 [1974] 182頁)。ya eva hetus traikālye pratiṣedhavācī sa uktoraḥ pratyavagantavyaḥ / kasmāt / sādhyasamatvāt / (VV p.83.16-17, Yonezawa [2008] pp.326-327, Westerhoff [2010] p.40)

『十二門論』に見られる「同疑因」については五島 [2009a] 40-42頁参照。

- 39) 「観生門」とは「生 (utpāda) を考察する章」の意。第1章から前章までの考察を総括して、さまざまな事物・事象には「生起」そのものが、已生 (過去) ・未生 (未来) ・生時 (現在) のいずれにおいても成立しえないことを論証する。
- 40) 原文は「生果則不生 不生亦不生 離是生不生 生時亦不生」。この偈は、『空七十論』第5偈にほぼ合致するが、『中論頌』七・14の改作と考えられる。これに関しては既に五島 [2002a] 98-99頁で論じているが、ここでもう少し詳しく検討しておきたい。

『空七十論』第5偈は次の通り。

skyes pa bskyed par bya ba min // ma skyes pa yang bskyed bya min //
skye ba'i tshe yang bskyed bya min // skyes dang ma skyes pa yi phyir // 5 //
(ŚS p.12, Lindtner [1982] p.36)

すでに生起したもの (jāta) はもはや生起することはないし、いまだ生起していないもの (ajāta) も生起することはない。現に生起しつつあるもの (jāyamāna) も生起することはない。なぜなら、〔現に生起しつつあるものは〕すでに生起していると同時にいまだ生起していない (半已生半未生) ののであるから。

下線部が、『十二門論』第26偈c句の「是の生と不生とを離れて」とは異なる。リントナーはこれを jātajātavinirmukta とし (Lindtner [1982] p.37, f.n.5.)、瓜生津訳は「なぜなら、すでに生起したものと いまだ生起していないもの〔を離れては生起する時はないの〕であるから」とする (瓜生津 [1974] 93頁)。しかし、この偈は、『中論頌』二・1の形式を使って、七・14 (『青目註』15) の意を表すべく改作されたものと思われる。

『中論頌』七・14 (『青目註』15) は〈已生・未生・生時はいずれも生じない。それは已去・未去・去時によって既に解説された通り〉とし、二・1は〈已去も未去も去らない。已去と未去を離れて、去時は去らない〉とするが、その原文を以下にあげると、まず、七・14は、

notpadyamānaṃ notpannaṃ nānutpannaṃ kathaṃ cana /
utpadyate tathākhyātāṃ gamyamānagatāgataiḥ //
現に生じつつあるものも、すでに生じたものも、まだ生じていないものも、生じることはまったくない。〔このことは〕現に去りつつあるもの、すでに去ったもの、まだ去っていないものによって、〔第2章において〕すでに解説した。

また、二・1は、

gataṃ na gamyate tāvad agataṃ naiva gamyate /
gatāgatavinirmuktaṃ gamyamānaṃ na gamyate //
まず、すでに去ったものは去らない。まだ去らないものも去らない。すでに去ったものとまだ去らないものを離れて、現に去りつつあるものは去らない。

七・14の意を完全に表すために、二・1の√gamを√janに変えたと、

jātaṃ na jāyate tāvad ajātaṃ naiva jāyate /
jātājātavinirmuktaṃ jāyamānaṃ na jāyate //
まず、すでに生起したものは生起しない。まだ生起しないものも生起しない。すでに生起したものとまだ生起しないものを離れて、現に生起しつつあるものは生起しない。

となる (韻律は、いずれも Anuṣṭubh)。これは、『十二門論』の「生果則不生 不生亦不生 離是生不生 生時亦不生」に合致する。

なお、先にあげた『空七十論』の偈は、瓜生津訳が依拠した『空七十論註』中の偈であり、『空七十論』自体が伝える偈は以下の通り。

gang zhig skyes de bskyed bya min // ma skyes pa yang bskyed bya min //

skyes pa dang ni ma skyes pa'i // skye bzhin pa yang bskyed bya min // 5 //
 (Lindtner [1982] p. 36)

既に生起したものは生起することはない。いまだ生起していないものも生起することはない。〔半分は〕既に生起し〔半分は〕いまだ生起していないところの現に生じつつあるものも生起することはない。

このように「生時」を「半未生半已生」の観点から論じるのは『青目註』にも見られる（『青目註』七・11の釈）が、『十二門論』では言及しない。

この「半未生半已生」の「生時」を『四百論』（XV・16）は次のように否定する。

jāyamānārdhajātātṽj jāyamāno na jāyate /
 atha vā jāyamānatṽṣ sarvasyaiva prasajyate // (CS p.140.1-2)
 生じつつあるものは半分すでに生じているものであるから、生じつつあるものは生じない。もしそうでないならば、ほかならぬ一切のものにおいて、〈現に生じつつあるものであること〉が過失として付随してしまう。

この偈は『プラサンナパダー』にも引用される（Pp p.80.3-4）。

- 41) 原文は「(生果不) 生」。『無畏論』の対応箇所では、skyed par byed (utpādayati) とあり、「生起させる」の意であるが、自らを生起させる意も含むので、以下、文脈に応じて「生起させる」「生起の作用をもつ」に訳し分けることとする。
- 42) 『中論頌』二・5は、同じ論法で「去 (gamana)」を論じている。
- 43) この部分は、『無畏論』七・14の釈よく合致する。以下に、『無畏論』七・14の釈の全文の原文を挙げるが、和訳は、本稿の第3節のcにおいて、『十二門論』『青目註』と対照して示すこととする。

(X)

skye bas gzhan skyed par byed na / skyes pa dang ma skyes pa dang skye¹ bzhin pa zhiḡ skyed par byed grang na / brtag pa rnam pa gsum char yang skyed par mi byed de / ji ltar skyed par mi byed pa de ltar ni song ba² dang ma song ba dang bgom pa dag gis de dag rnam par bshad zin to // de yang ji ltar zhe na / bshad pa /

12.2.1

① re zhiḡ dngos po skyes pa ni skyed³ par mi byed de / ci'i phyir zhe na / thug pa med par thal bar⁴ 'gyur ba'i phyir dang / byas pa la bya ba med pa'i phyir te / dngos po gang skyes pa yang skyed par byed na / lan gnyis skyes pa yang lan gsum bskyed dgos la lan gsum skyes⁵ pa yang lan bzhir bskyed dgos pa dang / de bzhin du dang po skyes pa dang 'og tu skyes pa dag kyang de bzhin du 'gyur te / de lta na skye ba mthar thug pa med par 'gyur bas de ni mi 'dod^(6 de / 6) de'i phyir dngos po skyes pas skyed par mi byed do //

② gal te yang skyes pas skyed par byed na / skye ba gang gis bskyed par bya bar brjod pa'i skye ba gzhan de ma skyes pa bskyed⁷ pa yin pas / de la skyes pa skyed par byed do // zhes dam bcas pa nyams te / ci'i phyir zhe na / de dang po skye ba'i

snga rol na⁸ ma skyes pa yin la / ⁹ de nas skyed par yang byed na / de'i phyir 'ga' zhig skyes pa skyed par byed la / 'ga' zhig ni ma skyes pa skyed par byed pas ¹⁰ mi mthun pa nyid du 'gyur ba'i phyir te / de ltar 'dod na ma nges pa nyid kyang yin la / byas pa la bya ba med pa dang / bsregs pa la bsreg¹¹ par bya ba med pa dang / song ba la bgrod par bya ba med pa dang / mngon sum du byas pa la mngon sum du bya ba med pa dang / skyes pa la skyed par ⁽¹²⁾byed pa¹²⁾ med pas / de'i phyir re zhig de ltar chos skyes pa 'ga' yang skyed par mi byed do //

12.2.2

① chos ma skyes pa yang skyed par mi byed de / ci'i phyir zhe na / skye ba dang mi ldan pa'i phyir dang / ma skyes pa thams cad kyang skye bar thal bar 'gyur ba'i phyir te / 'di na ma skyes pa ni skye ba dang mi ldan la / de yang dngos po skye ba dang ldan pas skyed par byed dam / 'on te dngos po skye ba dang mi ldan pas skyed par byed grang na / de lta na bya ba med par yang byed pa dang / 'gro ba¹³ med par yang 'gro ba dang / za ba med par yang za ba dang / 'dod chags med par yang chags pa dang / zhe sdang med par yang sdang ba dang / gti mug med par yang rmongs par 'gyur te / tha snyad rnams dang 'gal bas de yang mi 'dod de / de'i phyir dngos po ma skyes pa yang skyed par mi byed do //

② gal te yang dngos po ma skyes pa skyed par byed na / don gang dag ma skyes pa de dag thams cad kyang skye bar thal bar 'gyur te / de la byis pa so so'i skye bo thams cad la byang chub ma skyes pa de yang skye bar thal ba dang / dgra bcom pa mi g'yo ba'i chos can rnams la kun nas nyon mongs pa ma skyes pa de yang skye bar thal ba dang / ri bong dang rta'i rwa la sogs pa ma skyes pa de yang skye bar thal ba 'gyur bas de yang mi 'dod de / de'i phyir ma skyes pa yang skyed par mi byed de / nyon mongs pa bsregs pa'i nyon mongs pa bskyed pa bzhin no //

③ 'dir smras pa / ma skyes pa ni skyed par byed de de yang gang rgyu dang rkyen tshogs pa dang / yul dang dus dang / byed pa po dang thabs dang ldan par skyed par byed kyi ma skyes pa thams cad ni skyed par mi byed de / gang rgyu dang rkyen tshogs pa dang yul dang dus dang byed pa po dang thabs dang bral ba skyed par mi¹⁴ byed pas / de'i phyir ma skyes pa thams cad skye bar thal bar mi 'gyur ro //

'dir bshad pa / gang rgyu dang rkyen tshogs pa dang / yul dang dus dang / ¹⁵ byed pa po dang thabs dang ldan pa skyed par byed do zhes bya ba de¹⁶ yang yod par gyur pa¹⁷ yang skyed par mi byed / med par gyur pa¹⁸ yang skyed par mi byed / yod med du gyur pa¹⁹ yang skyed par mi byed de / rnam pa de gsum char gyis skyed²⁰ pa mi 'thad par sngar rnam par bshad zin pas / de'i phyir ma skyes pa yang skyed par mi byed do //

12.2.3

① de bzhin du dngos po skye bzhin pa yang skyed par mi byed de / ci'i phyir zhe

na / skyes pa skyed par byed pa'i skyon du²¹ thal bar 'gyur ba'i phyir dang / ma skyes pa skyed par byed pa'i skyon du thal bar 'gyur ba'i phyir te / skye bzhin pa skyes pa gang yin pa yang gtan tshigs sngar smos pa dag gis skyed par mi byed la / skye bzhin pa ma skyes pa gang yin pa yang gtan tshigs sngar smos pa dag gis skyed par mi byed do //

② gal te yang skye bzhin pa skye ba med cing / 'on kyang skye bzhin pa skyed par yang byed na ni / skye ba med pa'i skye bzhin pa ma mthong bas de'i phyir skye bzhin pa skyed par mi byed do //

③ gang la skye bzhin pa skyed par byed pa de la skye ba gnyis su thal bar 'gyur te / skye bzhin pa ⁽²²⁾ gang gis ⁽²²⁾ skye bzhin pa nyid du 'gyur ba²³ dang / skye bzhin pa skyed par byed pa gang yin pa'o²⁴ // skye ba gnyis su mi rigs te / dngos po skyes pa gnyis med pa'i phyir ro // de'i phyir skye bzhin pa yang skyed par mi byed do //

④ skye ba rtsom pa'i snga rol na yang gang du skye ba rtsom par ²⁵ 'gyur ba'i skye bzhin pa med de /²⁶ skye ba rtsom pa med na skye bzhin pa yang med pa'i phyir skye bzhin pa skyed par mi byed do //

12.3

de ltar skyes pa dang ma skyes pa dang²⁷ skye bzhin pa skyed par mi byed pa'i phyir skye ba rab tu mi 'grub ste / skye ba rab tu ma grub na / gnas pa dang 'jig pa dag kyang rab tu mi 'grub bo // skye ba dang gnas pa dang 'jig pa dag rab tu ma grub na / 'dus byas kyang rab tu mi 'grub ste /

(Y)

de ltar de dag ni song ba dang ma song ba dang bgom pa dag gis²⁸ rnam par bshad par khong du chud par bya'o // (*ABh* D 46a3-47a6, G65b-67b1, P 54b4-56a3, Huntington [1986] pp.314-318, Pandeya [1981] p.124) 1) GHP: skye. D: skyes. 2) GHP: ba. D: pa. 3) DGH: skyed. P: skyes. 4) GHP: bar. D: par. 5) GHP: skyes. D: skyed. 6) DH: de /. GP: do //. 7) GHP: bskyed. D: skyed. 8) GHP inserts: / . 9) GHP omits: / . 10) DGH: pas. P: par. 11) D: bsreg. GHP: bsregs. 12) D: byed pa. GHP: bya ba. 13) GP omit: ba. 14) P omits: mi. 15) GP omit: / . 16) GHP insert: la. 17) GP: pa. DH: ba. 18) DGP: pa. H:ba. 19) DGP: pa. H:ba. 20) DH: skyed. GP: bskyed. 21) DGH: du. P: tu. 22) DH: gang gis. GP: gang gang gi. 23) GHP: ba. D: pa. 24) DGH: pa'o. P: ba'o. 25) GH insert: mi. 26) G: do //. DHP: de /. 27) G inserts: / . 28) G: gis. D: ni. HP: gi.

44) 全体の漢字数は10,330字であるが、第9章はわずか130字にすぎない。

45) なぜ「十二門」なのか、題名の由来を考究したのが五島 [2005a] である。

46) 問曰。若諸法無性、即有無性法有何咎。答曰。若無性云何有法、云何有相。何以故。無有根本故。但為破性故說無性。是無性法若有者、不名一切法空。若一切法空、云何有無性法 (*Taisho* Vol.30 18b4-8)。(下線部を〔大〕は「異相無性」とするが、〔三〕により

「無性」とする。)

『青目註』は論主のこの答に対する反論を他の注釈にはまったく見られない偈(つまり『青目註』第4偈)として挙げている。次の『中論頌』第4偈でも『釈論』以外の他の注釈では前半を反論者の偈としているが、『青目註』は全体を反論者に対する論主の答としている。その際、前の偈(『青目註』第4偈)との整合性を考慮してか、『中論頌』第4偈の前半と後半を入れ換えて『青目註』第5偈としている(『釈論』は釈においても論主の主張で一貫しているので入れ換えはしていない)。

47) 原文は chos kyi ngo bo nyid med pa であるが、これを Pandeya [1981] p.232は dhar-masyāvabhāva と還梵している。しかし、この場合の kyi は同格を表す属格助辞と解すべきである。つまり、「法という自性」の意である。アビダルマが説き、龍樹が否定しているのは、まさにこの意味での「法=自性」である。

48) dngos rnams ngo bo nyid med de // gzhan du 'gyur ba snang phyir ro // 3ab // bcom ldan 'das kyis rdzun¹ pa zhes² gsungs pa ni med pa dang chos bdag med pa'i don ma yin gyi³ dngos po rnams la gang zag ngo bo nyid med pa'i don yin⁴ te / ci'i phyir zhe na / gnas skabs gzhan du 'gyur ba snang ba'i phyir ro //

ngo bo nyid med dngos med de⁵ // gang phyir dngos rnams stong pa nyid // 3cd // chos kyi ngo bo nyid med pa'i dngos po ni med de⁶ / ci'i phyir zhe na / gang gi phyir dngos po rnams stong pa nyid⁷ yin na chos kyi ngo bo nyid yod par mi 'thad pa'i phyir ro // (ABh D 58a7-58b1, G 104b4-6, P 68b3-6, Huntington [1986] p.374, Pandeya [1981] p.232) 1) D:brdzun, GHP:rdzun. 2) DGP: zhes. H: de. 3) DH:gyi. GP:gyis. 4) P repeats: yin. 5) D:dngos po med. HGP:dngos med de. 6) D:do. HGP:de. 7) DH: stong pa. GP:stong pa nyid.

49) インド哲学では、基体を dharmin、その属性を dharma とするが、ここでは基体は「法 dharma」つまり「自性 svabhāva」であり、「空 śūnya」がその属性、「空性 śūnyatā」はさらにその属性ということになる。「三世実有法体恒有」に要約されるように、「法」の実有性が、反論者たる有部の主張の根本になっているからである。Cf. Siderits and Katsura [2008] pp.177-178.

50) 津田自身は、真撰説に疑念を抱かせる材料をいくつか挙げながらも、最終的には、いずれも決定的な材料にはならず、偽作を断定するには更なる検証が必要だとしている(398-399頁)。

なお、Westerhoff [2010] は真偽説に関して Tola and Dragonetti [1998] の所論を否定的に紹介し、『中論頌』と『廻諍論』の関係を、前期と後期とで思想的に大きな変貌を遂げたウィットゲンシュタインになぞらえることで、『廻諍論』が真撰であることを示唆している(pp.6-9)。

51) 注41参照。

52) 同じGでは、『無畏論』『十二門論』が「兎馬」とするところを『青目註』は「兎等」としている。

- 53) Hでは、生起の前提になるものとして、『無畏論』が「因縁和合・場所・時間・作者・方便」とするのに対して、『青目註』は「縁・作・作者・時・方」、『十二門論』は「因縁和合・時・方・作者・方便」としている。
- 54) 第3章では『サーンキヤ・カーリカー』第7～9偈を前提に論が進められ、とくに、具体例の説明は、現存する諸注釈に共通するもの、類似するものが用いられている（五島 [200b5]）。また、第4章において、『ニヤーヤ・スートラ』2・2・8の「無相の相」に関連して諸注釈が用いる「無地の衣」の例が用いられている（五島 [2012a]）。また、有神論批判は第10章で反論者の口を借りて展開されている（五島 [2002c]）。
- 55) この論文の中で（また五島 [2012a] の中でも）、僧叡による「十二門論序」が後代の偽作であるとする説（木村 [2009]）があることを指摘したが、文章自体の構造からも、偽作を思わせる箇所がある。同じ僧叡の手になる「中論序」と近似する表現を以下に挙げておこう。
- a 十二門論序：殊致之不夷。乖趣之不泯。大士之憂也。是以龍樹菩薩。開出者之由路。
中論序：道俗之不夷。二際之不泯。菩薩之憂也。是以龍樹大士。析之以中道。
- b 十二門論序：并目品義題之於首。豈其能益也。庶以此心開自進之路耳。
中論序：并目品義題之於首。豈期能釋耶。蓋是欣自同之懷耳。
- 『出三藏記集』「序卷」には僧叡作とされる序が10種、載せられている。これらの文章には当時共通に用いられた道学的・儒学的語彙が数多く見られるが、句や文の単位で見れば、各序の主題に合わせて多様な形式・構造を備えている。ところが、『十二門論』だけは、上記のように「中論序」に酷似した文を含んでいるのである。この他、序の作者名を挙げない大蔵経（具体的には、高麗版および房山石経）があることも指摘しておきたい。

キーワード 無畏論 青目註 空七十論註 廻諍論